〈研究ノート〉

同時代ヒンディー文学を代表する女性作家の主要作品が映し出すインド社会
—インドの女性の幸福とは—　（３）

菊 池 智 子

１．はじめに

研究ノート第三回目では、チットラー・ムドゥガル(Chitrā Mudgal)とアルパナ・ミシュラ(Alpanā Miśra)を取り上げる。

２．女性作家紹介・インタビュー

２－１）チットラー・ムドゥガル

発表作品について以下に記す。

小説：エク・ザミーン・アプニ(Ek zamīn apanī)(1990), アーワーン(Āwān)(1999), ギリガドゥ(Giligaḍu)(2002), ザ・クルセイド(The crusade)(2002)

短編集：ザハル・タヘラ・フア(Zahar ṭhahara hua)(1980), ラクシャグラハ(lakṣhāgraha)(1982), アプニ・ワーパシー(Apnī vāpsī)(1983), イス・ハマーム・メン(Is hamām men)(1986), ギャーラハ・ランビー・カハーニヤン(Gyārah lambī kahāniyān)(1987), ジャグダンバ・バブ・ガンワ・アア・ラヘ・ヘン(Jagdamba babū gānva ā rahe hain)(1992), チャルチト・カハーニヤン(Charchit kahāniyān)(1994), マームラー・アーゲー・バレーガー・アビー(Māmlā āge baṛhegā abhī)(1995), ジナーワル(Jināvar)(1996)

児童小説：マダヴィ・カンナギ(Mādhavī kannagī)(1993), マニマイカレ(Manimekhale)(2002), ジーワク(Jīvak)(2002)

児童向け短編集：ジャンガル・カ・ラージ(Jangal kā rāj)(1980), デシュ・デシュ・キ・ロークカタエン(Deś deś kī lok kathāen)(1986), ニーティ・カ

タエン(Nīti kathāen)(1987), スージュ・ブージュ (Sūjh būjh)(2003), ペール・パル・カルゴーシュ(Peṛ par khargoś)(2006), ドゥール・ケ・ドール(Dūr ke ḍhol)(2006)
演劇 : パンチ・パルメーシュワル・タタ・アンニャ・ナタク(Panch parmeśwar tathā anya nāṭak)(2005), サドガティ・タタ・アンニャ・ナタク(Sadgati tathā anya nāṭak)(2005), ブーリー・カーキー・タタ・アンニャ・ナータク(Būṛhī kākī tathā anya nāṭak)(2005)
受賞について以下に記す。
1986 年『イス・ハマーム・メン』がサーヒティク・クリティ賞（ヒンディー・アカデミー、デリーより）、1986 年『ジャンガル・カ・ラージ』がバール・サーヒティヤ賞（ヒンディー・アカデミーより）、1994 年『エク・ザミーン・アプニ』がファニシュワル・ナート・レーヌ賞、1995 年サーヒティヤカール・サンマーン賞（ヒンディー・アカデミー、デリーより）、2000 年『アーワーン』がサーヒティク・クリティ賞（ヒンディー・アカデミー、デリーより）、2002 年ヴィール・シン・デーヴ賞(マッディヤプラデーシュ州より)、2003 年『アーワーン』がウィヤース・サンマーン賞、『アーワーン』がインドゥ・シャルマ・カター・サンマーン賞（イギリス）、2005 年『ギリガドゥ』がチャクラダル・サンマーン賞（マッディヤプラデーシュ州）等

チットラー・ムドゥガルは 1944 年 12 月 10 日チェンナイ生まれ。ムンバイでヒンディー文学修士課程を修了する。チットラーはヒンディー文学作家、労働組合運動家、社会活動家、スラムに暮らす恵まれない女性たちの母、妻、主婦である。青年時代より社会的弱者と共に暮らし、働き、問題を理解、解決し、生活の向上をめざす活動を続けている。[Chitra Mudgal online 1] さまざまな文学、社会団体に所属し、現在は主に「ウッタル・プラデーシュ・マヒラー・マンチ」（ウッタルプラデーシュ州女性団体）で活動している。1965 年～72 年は NGO・JAGRAN の書記として、ムンバイのスラムに暮らす女性家庭内労働者の支援活動をした。1979 年～83 年は NGO・Swadhar で経済的自立支援活動をした。社会団体 Stree Shakti、

Abhivyakti などのメンバーも務める。チットラーは都市部の女性や子供たちなど社会的弱者のために母の視点から草の根の社会活動をする唯一の作家だ。自身が運営する組織 Samanvay のモットーは人々に社会的責任の意識と覚醒をもたらすことで、社会的、経済的、個人的利益を追求しないため登録すらしていない。「何かのために働きたい人は誰でも歓迎、そして共に働く」と彼女は笑う。この豊富な経験が社会的弱者の人生を作品に生き生きと甦らせる。

「空腹は時に、人生の価値、道徳、人間性を脇へ追いやってしまう。そしてそれがだんだんと人の性質に取ってかわってしまう。貧困は犯罪と不正の温床だ。社会の飢えた人々がひとり残らず空腹を満たして寝ることが出来て初めて、価値や道徳は機能できる。」[インタビュー 2011 年 12 月 29 日]

とは現場の経験があってこその言葉だ。

「現実を現実のように繊細な心理描写とともに描かなければ、作品はただの娯楽になってしまう。現実社会に精通していなければ長く残る作品は書けない。私もこれ程社会活動をしていなければ、良い作品はかけなかったと思う。偽りの話を書きたくない。言行一致の人生を生きたい。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

人々の精神をより良く理解するため、読者が共感しやすいキャラクターを作り上げるため、作家は人々の間に入っていかなければならない。執筆を左右するのは読者だけで、読者が怒り、読み、理解し続ける限り、書き続けるという。読者との一体感を好み、読者の愛と称賛の手紙や電話が自分の原動力だと語る。一人娘と婿を交通事故で亡くしたが、彼女の夫で『サリカ』誌の元編集長アワド・ナライン・ムドゥガル、息子、嫁、三人の小さな孫たちがチットラーの社会的使命を担う人生をサポートしている。チットラーは英語、グラジャート語、マラーティー語作品のヒンディー語訳をする。いくつかの作品は、ベンガル語、英語、グジャラート語、マラヤーラム語、マラーティー語、オリヤ語、テルグー語、ウルドゥー語、イタリア語、ドイツ語、チェコ語などに翻訳されている。アムリト・ナーガルとプレームチャンドの作品に影響を受け、アギャーエ、ムクティボード、

カムレーシュワル、クリシュナー・ソーブティー、パンカジ・ビシシュト、ギータンジャリシュリーなどに傾倒している。現在小説『エク・カーリー・エク・サフェード』（仮題）の執筆中。一般の人々を悪用する現代のシステムを描く予定だ。

チットラーはインド社会の女性の問題について以下のように語った。

「大昔からインドの女性には言葉が無い。口があっても言葉が無い、頭があっても無いものとされてきた。インドは封建社会で男性優位の社会だ。その悲惨な情況の中、女性たちが自分の立場を知らなかったのかというと、そうではない。女性たちは本当によく理解している。2500年前のパンチマハーカーヴィヤ（5大叙事詩）を見れば明らかだが、女性の偽りの理想の姿、サティ（貞操）の教えがタミル地方にはある。女性は性的欲求解消の道具であると明記されている。王たちは慈悲深さを誇示するために女性を何人も囲った。サティの思想では女性自身の願いや要求は夫が満たすもので、女性自身では出来ないものとされる。だから2500年も前から、女性が自分で何かしようものなら反社会的とされてきた。サティとは、女性が身につける最高の徳で、女性を閉じ込める方法でもあった。最悪なことに、女性と男性は同じ頭脳と能力を持つのに、サティの徳を受け入れると平等は完全に無視された。私は女性の存在やアイデンティティのために闘う。だからサティのような風潮には反対だ。自分の娘を医者やエンジニアにする現代的な父親も、結婚後の娘はいつも夫と一緒に、夫の頭の中にいなければならないと考える。確かに娘には才能があるが、家庭に問題が生じたら、その存続のために女性が妥協しなければならないと考える。この15年、女性論が盛んに論じられている。しかし1930年代にマハーデーヴィー・ワルマーが提唱した「調和」が現代では忘れ去られてしまった。女性の搾取の話ばかりで、調和については語られない。マハーデーヴィーは女性の性の問題にふれなかったが、１９５５年、クリシュナー・ソーブティーが小説『ミットロー・マルジャーニー』で初めて闘争を始め、発禁になったムリドゥラ・ガルグの『チトコバラ』が続いた。１９７０年代、マンヌー・バンダーリーの作品には、教育

を受けた女性の行動が描かれた。『アープ・カ・バンティ』には、経済的に自立しても精神的には男性に依存し続ける女性が描かれている。それでも多くの若い女性が勇気づけられたことは事実だ。同じ頃、ウーシャー・プリヤンワダーは小説『パチパン・カンベー・ラール・ディワリ』で女性には男性と同じ能力があると訴えた。テーマは女性の精神的依存からの解放だ。インド独立後の女性作家たちは、女性の人生の痛み、挑戦、闘いを作品に綴ってきた。私は６０年代から社会活動をしながら執筆しているだた一人の女性作家だ。ムンバイでは出稼ぎ労働者女性をたくさん見た。権力は無能で、５か年計画などの政策は無意味だ。インドの女性論議というのは、社会論議の中でなされるべきだ。何故なら責任は社会にあるからだ。1990 年の小説『エク　ザミーン』では広告で女性がどのように扱われるかを描いた。広告は女性に現代的な考え方を伝える大切な役割を担う。しかし一方で、モノから解放された女性をまたモノに戻す。女性の頭脳は無価値で容姿だけに価値があるとする男性優位の権力に、再び女性は操られる。かつて広告界にいた私は、何故頭脳ではなく顔の美しさだけで女性の価値を決めるのかと、クリームの宣伝に反対した最初の女性社員だった。指定部族の女性は性的に解放されていると言われる。しかし、夫は夜酒を飲み、妻を殴る。『マルド（Mard）』という短編でこの問題を扱った。ハンス誌上では１５年にわたって女性論議が交わされているが、その主な思想は恋人を見つけて寝る自由なのだ。誰も女性の頭脳の話はしない。女性は男性と同じくらい有能なのだと叫ぶ作品は無い。私の闘いは女性の陰部の解放ではない。何故なら性の自由を得ても、他の問題で女性は必ず苦しむからだ。頭脳のために闘わなければならない。女性の頭脳は何世紀も遅れをとってしまった。あなたも飛行機の操縦や電気修理ができて、家計を担えるのだと女性に教えなくてはならない。この闘いを最初に始めたのがマハーデーヴィーで、父権社会や封建社会の女性の苦しみを描いた。それなのにハンス誌上で１５年間続く女性論議では、性的解放が女性の自由だという。ならば、性的に自由な娼婦は何故自由でないのか。娼婦は自分の意思で、時には意

思に反して、性的な活動ができるのに何故自由ではないのか。マハーシュウェーター・デーヴィーにはこの謎が分かる。しかし都会に暮らし、想像で文学を書いている者には分からない。社会と本当に関わっていないのだから、土の下、木の根の何処に虫がついているのか分かるはずが無い。聞こえの良い西洋の女性論、肉体の解放を女性のアイデンティティのために持ち出しただけだ。私は要らない。女の子が自分の意思で、もしくは意思に反して男性と肉体関係になっても、井戸に飛び込んで自殺する必要はない。無理強いされたのなら、風呂に入って洗って忘れてしまえばいい。最近の女の子はレイプされたら黙っていないで、警察に訴えるようになった。インドの７０％を占める村に暮らす女の子たちは、いつも都会の女の子をモデルにする。そうして変っていく。女の子たちを正しい方向に導くために文学は大切な役割を担う。テレビや他のメディアよりも文学は心に深くうったえ、読者たちは登場人物から多くのことを学ぶ。スタイルや容姿が女性の価値を決めるものでは無いと訴える文学が必要だ。インドの文化を愛するような文学が必要だ。私の作品で、主人公は夫にこう言う。私は美しくカットされた盆栽や部屋のインテリアではない、モノではないと。私は盆栽を見るとインド女性の源を感じる。盆栽は芸術ではあるが、娯楽のために自然から切り取られた姿なのだ。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

チットラーは女性の幸福について以下のように語った。

「女性の幸せは子宮と関係している。女性の最大の幸福は自分の子宮から社会を、つまり世界を生み出すことだ。女性と男性の最大の違いは子宮の有無。子宮を持つ女性は社会の創造者だ。男性よりも偉大なのだ。昔の女性は理解できないが、今の女性なら理解できる。女性と男性が平等で同権が必要と思うなら、女性はまず自分の息子を教育しなければならない。昔からよく言われるのは‘男のくせに泣くんじゃない、女に１回叩かれたら１０回叩いてやれ’‘女の子が暗くなった

後家にいないなんて良くない’‘兄弟に水を出すのは女の子の役目’。こうして何代も母親が娘をコンディショニングしてきた。男性優位の社会がそうさせている。だから現代女性の最大の幸せは、自分の子宮から、自分が欲するような男性と同等の社会を作れることだ。他にも幸せはあるだろうが、これこそ恒久的な幸福だ。男性が女性をコンディショニングして、自分の都合のいいように作ってきたのだから、男性に女性の望む社会は作れない。女性こそが自分の子供をとおして新しい社会を作ることができる。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

２－２）アルパナ・ミシュラ

発表作品について以下に記す。

小説 :『アンヒヤレ・タラチャタ・メン・チャマカー』(Anhiyāre talchhaṭ men chamakā)（2013）

短編集 :『ビータル・カー・ワクタ(Bhītar kā vakt)』 (2006), 『チャーワニー・メン・ベーガル(Chhāvanī men beghar)』 (2008)、『カブラ・ビー・カイド・アウ・ザンジーレン・ビー(Kabra bhi kaid au zanjīren bhi)』（2012）

受賞について以下に記す。

2006 年シャイレシュ・マティヤニ・スムリティ・サンマーン賞、2006 年パリウェーシュ・サンマーン賞、2008 年ラチュナーカール・サンマーン賞（バーラティーヤ・バーシャー・パリシャド、コルカタより）、2008 年シャクティ・サンマーン賞、等。

アルパナ・ミシュラは１９６９年生まれ。ヒンディー文学修士、博士課程をベナレスのカーシー・ヒンドゥー大学で修了。ヒンディー文学同時代を代表する若手作家で、多くの文学者、文学評論家の期待を集めている。『ハンス』『カターデーシュ』『インディア・トゥデー』『ナヤーギャーノダエ』『パハル』『ワーガルト』『サムカーリン・サーヒティヤ』など多くの文学誌に、短編小説、詩、評論などを発表している。クリシュナー・ソーブティーいわく「アルパナの作品は、深く、そしてシンプルだ。関係性と情況という外面から“内面”を見る。これこそが今の女性の心に起こっている大きな変化だ。我々はアルパナの深い洞察力にも期待している。彼女は

きっと女性の就職や経済的自立に関する新しい感性を描いてくれる。」[Alpana Mishra 2006:back page] アルパナの短編作品には現代インドの様々な社会問題が描かれる。その多くが女性の問題で、以前の女性作家の作品とは異なる特徴がある。アルパナいわく、

「一世代前の女性作家の作品には初めて社会進出した女性が描かれている。しかし私の世代の登場人物はもっと覚醒した女性たちで、社会を相手に戦う用意が出来ている。知力も知識もより多く身につけている。以前の作品の女性たちは外に向かって戦っていた。しかし今の世代の登場人物には、内と外の両方に戦いがある。自分自身の行動に疑問を持ち、自分は何故そうするのかと常に問い続ける。」[インタビュー2011 年 10 月 7 日]

このようにアルパナは、男対女ではなく、自身と同年代の女性を中心にその内面の葛藤やアイデンティティを描く。現代日本社会で同年代の女性が抱える悩みと重なる部分も多く、両国女性の問題の共通点がいくつも見つかる。うつ、高齢の両親の世話、結婚生活や夫婦生活における男性の無理解などが取り上げられる。同時代の女性の問題を真正面から受け止めた描写は、現代社会の都市部に暮らす女性たちの共感を得る。現代社会に生きるインド女性の現実を映し出す貴重な作品といえる。すべての作品が実体験や徹底した調査に基づいて書かれている。事実に基づくものだ。例えば軍人の家族を描いた『チャーワニー・メン・ベーガル』は、自身の結婚後の実体験に基づく。軍人家族に対する当局の不当な対応を徹底調査し、その資料を関連機関に提出、状況改善の努力もしている。『ミッドデーミール(miḍde mīl)』は自身の幼少期の体験に基づく作品だ。アルパナの世代で都市部に暮らす中流階級以上の教養ある女性は、伝統的なしがらみからある程度解放されているか、解放されるべきと考えている。アルパナの父母は６０代後半の教養人で、父は大学で教鞭をとり、母もベナレス・ヒンドゥ大学に学んだ。ハザーリープラサード・ドゥヴィヴェディは叔父にあたり、文学的な環境で育った。アルパナは父母から受けた教育に感謝している。ヒンディー文学は南インドでも人気があり翻訳出版が進む。アルパナの作品がヒンディー語圏の大学教材になる前に『プシュパカヴィマーン』

などの短編作品の翻訳が、南インドの大学で既に教材となっていた。

アルパナはインド社会で最も深刻な女性問題についてこう語る。

「不公平、そして、平等の権利がないことがインド社会最大の女性問題。私は全作品で不公平な社会構造を取り上げた。離婚、セクハラ、レイプなどの問題に女性が立ち向かおうとしても、複雑で長いプロセスが、結局は女性の人生をだめにしてしまう。お金のある者は戦えるが、お金の無い者は長期間戦うことはできない。法律の構造自体、女性が法に訴えることを不可能にしている。この行為には家族の協力が不可欠だが、それを得られない女性が多い。家族自体もそのような情況に慣れていない。女性が自分の権利のために声をあげると、家から孤立を強いられる。法的にも一般的にも、社会には不公平が蔓延している。家では何をするにも女性には規制がある。良い女の子で、学校の規則に従うことが重視される。経済成長とともに若い女性の社会進出が進み、彼女たちは少しのスペース（自由）を手に入れた。それでも自分で稼いだお金を自由に使うことは非常に難しく、家に全額入れるのが一般的だ。社会進出して彼女たちはどれだけの自立を手に入れたのか、経済的に自立してどれだけの自由を手にしたのか。女性が経済的自立を目指して向かう場所、職場は非常に封建的で、女性に非常に不適切な環境だ。家という封建社会から抜け出して、行き着く先はまた職場という封建社会だ。女性は全く自由を手にしていない。女性を本当に自由にするためには、この社会構造自体の変革が必要なのに、だれも目を向けようとしない。この構造を変えるには、女性男性ともにコンディショニングを変える必要がある。女性の自立が進めば進むほど、女性に対する暴力が酷くなる。社会が女性の自立を受け入れる体制に無いからだ。この酷い情況の影には父権主義文化がある。女性は教育を得て自立を手にし、自分の意見を持ち、自分の意志をもつ。そして周囲と衝突する。この衝突にひとつひとつ勝って、自由と自立を手に入れなければならない。今は古い伝統やしきたりが新しく変りつつある時代だ。文化と伝統は別のもので、文化とは創られたものだ。今問題となっているのは、そこからできた因習という変化を嫌うもの

だ。因習に対する現代の若者の反発は強く、全く意味のないものに成り下がりつつある。しかし問題は、因習と社会構造の非常に強い結びつきだ。例えば、現代的な若いカップルが恋愛結婚をしたとする。インド社会で恋愛結婚は珍しく、この二人には社会がほんの少し自由なスペースを与えたといえる。結婚後、多くの夫がこう言い出す。『仕事は辞めろ。家に入れ。両親を孤独にするな』　因習から解放されて恋愛結婚したはずなのに、また昔の因習にとらわれていくのだ。社会構造は簡単には壊れないように出来ている。」[インタビュー2011 年 10 月 7 日]

アルパナはインドの女性の幸福についてこう語る。

「最初に注意すべきは、家庭と子供を自分の幸せの中心にするように、インドの女性の考え方や環境が作り上げられていることだ。教育の普及と経済的自立とともに、女性の幸福の範囲は広がってきた。最近は女性が個人的に獲得したものも彼女の幸福とされるようになった。個人的な願望や夢の実現に女性は幸福や喜びを感じる。今の女性はキャリアと家庭の両立に励むようになった。以前と違うのは、地位や名声のために結婚生活を犠牲にする女性が見られるようになったことだ。以前の女性は、家庭のためならキャリアなど喜んで捨てたものだった。今の女性はある程度たくましくなった。この勇気が、彼女たちにアイデンティティと存在意義を気づかせ、幸福をもたらす。この幸福は、恋愛や家族や子供から得るものとは別だ。幸福は一瞬のときもあるし、長く続くものもある。ある形に幸福を感じる人もいれば、そうでない人もいる。だから、ひとつの情況を幸福の定義と結びつけることは難しい。」[インタビュー2011 年 10 月 7 日]

３．作品紹介と分析

３－１）『アーワーン』『ギリガドゥ』（チットラー・ムドゥガル）

チットラーはヴィヤース･サンマーン賞を受賞した初めての女性作家で、受賞小説『アーワーン』は文学界で大変注目され、高い評価を受け、その

後も数々の受賞をした。『アーワーン』とは陶磁器を焼く窯を意味する。題名について作者はこう語る。

「芸術的で繊細なものをつくり、壊れないようにそっと窯に置く。私の小説の窯はインド独立後６０年の窯だ。インドは独立して自治を手に入れた。６０年間丁寧に作りあげてきたものがこの窯に入っている。そして焼きあがったものは何だったか。汚職。教育界にまで広がる汚職、搾取する者の多さは驚くばかり。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

有名な労働組合運動家ダッタ・サマントが活躍した時代、作者自身が長く深く関わってきた労働組合組織を忠実に描いた作品である。1982 年にサマント氏が中心となり、20 万～30 万人の繊維工場の労働者が長期にわたりストライキを敢行した事件があった。『アーワーン』は当時の社会的政治的構造の中での男女工場労働者の戦いを象徴している。1964 年 3 月 3 日、チットラーは初めてサマント氏とミーラー女史に出会い、女性支援団体『ジャーガラン』で活動するようになる。当時の『ジャーガラン』は家事と仕事をもつ女性労働者の様々な権利獲得を目指す団体だった。理由も無く突然解雇しない、病欠の給料は差し引かない、虐待や肉体的嫌がらせをしない、月３日の休暇と年に一ヶ月の休暇を与えるなどを要求していた。ミーラー女史はやがて労働組合運動の中心者となり、チットラーもそれに続く。そんな中、何者かが道端でミーラー女史の服を剥ぎ取り、後ろから刺し殺した。この事件が同小説執筆のきっかけになった。「ミーラーを殺したいなら、ただ殺せばいい。何故服まで剥いで恥をかかせる必要があったのか？女の能力の限界を体としか結びけられないような、旧習にとらわれ病んだこの社会を覚醒する責任は誰の肩にかかっているのか？たぶん、ミーラー女史の惨殺が、この小説を書くきっかけになったのだと思う。」[Chitra Mudgal 1999:9]この小説の目的のひとつは、男性の女性に対する卑劣な行動と思考を描きつくすことだ。労働組合の話は背景で、作者の本意は女性の自立の難しさを描くことだ。女性は子供を生む機械で、母になることが人生の目的で、社会的自立は必要ないという考えが、登場人物の男性の非人間的な行動や視点から明らかになる。540 ページにわたる長編小説『ア

ーワーン』は平凡な20代女性ナミターが経験を積み自立していく物語だ。ナミターは労働組合幹部の父を持つ。父親はとても有能で人望の厚い人物だったが、労働組合の内部闘争に巻き込まれ何者かに刺され、半身不随の体となり死亡する。父親は労働組合のトップ、アンナサーハブの右腕だった。経済苦の中偶然ナミターはジュエリーショップに高給の職を得て、モデル、ジュエリーデザイナーとして頭角を現していく。ジュエリーショップの客の裕福なビジネスマンで、長年子供の出来ないサンジャイと不倫し妊娠する。ナミターが流産すると、激怒したサンジャイは本性を現し、これまでのナミターの成功は全て子供を手に入れるために、金をつかって自分がお膳立てしたものだと明かす。女性は肉体として扱われ、男性の動物的欲求の道具とされる数々の例が描かれる。痴漢に悩まされる通勤。娘を近親相姦する父。ナミターは家族のように慕ってきたアンナサーハブの自慰行為を無理やり手伝わされ、レイプに劣らない精神的打撃を受ける。この上なく卑劣な行為だが、法的にも社会的にもレイプよりも非常に軽い罪として扱われ、時には罪とすら認められない。大半の被害者女性は、社会的批判を恐れて口を噤む。後にナミターはこの行為を「精神的レイプ」と明言している。[Chitra Mudgal 1999:160]何故直接的なレイプではなく精神的レイプを描いたのか作者に問うた。

「アンナサーブはインド最大の労組リーダー。１８ヶ月間も工場を閉め続けることができるほどの有力者。この人間の変貌を見せることが目的だった。これほどの地位の人間だからレイプはできない。自分の疲れを癒すために発作的に女の子の手をマスターベーションに借りただけだと自分にも相手にも言い訳する。大変社会的価値の高い仕事をしている人間が性的な激情にかられ、発作的にナミターを性的に苦しめた。背景として私の頭にはガンディーの逸話があった。ガンディーの父が亡くなり、目の前に遺体が横たわっていたとき、突然ガンディーは性的欲望に駆られ、妻のカストゥルバと別室へ行く。父の死という深い悲しみから癒えるために性的行動が必要だった。だから私の小説の中でも、ナミターは結局アンナサーブの行為を一時の迷いと赦すのだ。」[インタビュー2011年12月29日]

パワール、シッダールタ、アンナーサーハブ、サンジャイなど主な男性登場人物は皆同じ思考回路を持つ。女性にだけ献身と理想を求め、性的欲求に基づいた自分の独りよがりな行動に罪悪感は無く、自然のことと開き直り、女性の傷をなんとも思わない。一方作者は、就職という自立が女性の人生の目的にならず、結婚という目的の手段にすり替えられると指摘する。既婚女性だけが女性の人権を得られる社会的背景も語られる。未婚という理由でスナンダーは３年務めた会社から産休をもらえない。また、社会改革のキーを握るのは女性であり、女性が覚醒すれば、家庭は変わり社会は変わる。社会改革に対する女性の力と影響力が明確に述べられている。女性による草の根の改革、家庭の改革から社会はよりよく変わることが出来る。世界的な広い視野をもちながら、身近な活動を展開できる女性のモデルが、スナンダーとして描かれる。しかし社会改革の指導者たる覚醒した女性は、旧習深い社会では邪魔者だ。自立を目指す覚醒した女性にとってこの社会は生きづらく、時に命の危機にも及ぶ。妊娠したナミターは最終的に子供よりも自分自身の人生を優先する。男女は自立への考え方で対立する。サンジャイは経済や幸福感が充実していれば自立といい、ナミターは自己実現や人生の目標を達成することを自立と考える。物質的な自立か、精神的な自立か。しかし子供が欲しいだけのサンジャイにとって子供を産む機械のナミターの自立はどうでもよく、自分のお膳立てした自立でナミターを満足させようとしているだけ。『アーンワーン』には人の死が多く描かれる。人間の命の軽さを示唆する。生まれる前の命の軽さも描く。自分の都合で命を扱い安易に堕胎する現代の若い女性に自由を履き違えていると警告する。女児の誕生がひどく忌まれる社会環境では、男女で命の重さが違うことを訴える。作者は女性支援団体での活動から、教育の有無による女性の意識の格差を目の当たりにしてきた。小説からも、教養ある女性たちが自分の知識を現実の中で有効に使うことを作者が心から望んでいることがわかる。恵まれた人生を生き、フェミニズムという知識を得た女性は、机上の空論に遊ぶのではなく、教育の機会に恵まれなかった女性たちの悲惨な生活環境に目を向け、現実的に問題を解決する努力と援助をすべきだと訴える。主人公ナミターは最終的にすべてを失う。しかし自宅

には戻らず、キショーリーバーイの元に身を寄せる。この小説の中で一番平凡で一番自立している理想の女性だ。ナミターの父の愛人で私生児の娘スナンダーを産み、娘を自立し覚醒した思想を持つ女性に育てた。しかしその故にスナンダーは殺されてしまう。愛し続けたナミターの父も死亡してしまう。残された最愛の幼い孫娘は、将来を考え、断腸の思いで婿側のムスリム家族に引き渡す。しかし自らがヒンドゥーであるため、この行動がヒンドゥー原理主義者の誤解を生み、命を狙われる。女性として人間として当然の判断をすればするほど、環境に翻弄され命が脅かされる。この小説に一貫する男性の考え方は、女性は子供を生む機械であり、母となることが人生の目的であり、社会的自立は必要ないというものだ。キショーリバーイーは正反対の人生を生きている。結婚という社会規範にとらわれず母となり、男性に依存しない自立した人生を選んだ。作者はキショーリーバーイー等についてこう語る。

「キショーリーバーイーと娘は非常に自立した女性。キショーリーバーイーは、夫以外の男性との間に子供ができた。どんな事情であれ、肉体関係ができ子供ができても、お互いの家庭を壊すことは無かった。ここが大切な点だ。自分を責めることも、相手を責めることもなく、ただ責任を果たした。これが自立した女性だ。だから最後に主人公のナミターは、平凡だが自立した女性、キショーリーバーイーと一緒に住む決心をする。彼女はこの小説の理想の女性として描かれている。ナミターの父との間に私生児を産むが、それは彼女の貞操を傷つけるものではなかった。何故ならそのような貞操観念から彼女は解放されているからだ。彼女は新しい女性だ。村を捨てて大都会に出稼ぎに来る女性たちの代表でもある。出稼ぎ労働者の生活する所は、大都会であっても村なのだ。この小説を書くのに７年かかった。この小説はいつも女性論の作品と評価されるが、私は社会論の中に女性の問題を描いた小説と思っている。この小説には女性のいろいろな面を描いた。大きく分けて２種類の女性がいる。ひとつは都会の教養ある女性。豊かな生活を求めるあまり、身体を売り、代理母までやるようになってしまう。もう一方は、ガンディー主義者のビムラや、キショーリーバ

ーイーやその娘、ニッラマーなど裕福でも教育がそれほどあるわけでもないが、自分自身のために闘う女性。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

主人公ナミターが幸せを感じているのはサンジャイと恋愛関係にある時、モデルとして成功している時、ジュエリーデザイナーとして有望視されている時である。恋愛感情を除いては、自立に向かう環境に幸せを感じている。恋愛関係の中で感じる幸福は小説『チンナマスター』の主人公などとも共通している。

2002 年作の小説『ギリガドゥ』とは、マラヤーラム語で鳥を意味するギリカルをヒンディー語風に発音した言葉。当小説では小鳥のように騒がしい双子の孫の愛称だ。『ギリガドゥ』は、老人ジャスワント・シンの 13 日間の物語。ふたりの老人の退職後の孤独な人生が綴られる。技術職を退職したジャスワント・シンは、地方都市カンプルに妻と暮らしていた。妻に先立たれ、息子のナレンドラ家族と同居するためデリーにやって来る。ナレンドラ家族にとってジャスワントは招かざる客。バルコニーを改装した部屋が老人の居場所になる。ジャスワントは朝の散歩で退役軍人のスワミ老人と出会う。二人は意気投合し、朝の散歩とスワミだけがジャスワントの生きがいになる。ジャスワントは家族に邪険にされていることを嘆き、スワミはそれを元気付ける。しばらく会えない日が続き、心配になったジャスワントがスワミの家を訪ねると、心臓発作で亡くなっていたことを知りショックを受ける。幸せな家族生活の話をしていたスワミが、実は独居老人だった。現代インド社会に暮らす老人の切実な現状が描かれる。日本同様、現代インド社会でも都市部では老人の孤独や高齢者への尊敬を忘れた若い世代の問題が深刻だ。

「ギリガドゥはマラヤーラム語で、木に止まる鳥たちのさえずりを意味する。1970 年以降経済発展が始まり、世界がインド市場に注目するようになると、インドの文化である大家族が減少し、核家族が好まれるようになった。核家族が増え世帯数が増えれば、市場は潤い経済発展が加速するからだ。インドで老人は尊敬の対象だったのに、今やお荷物にされてしまった。最近は老人ホームがたくさんできた。私

は定期的に訪問している。そこで、‘あなたは自分の親をここに入れたが、あなたも自分の子供に同じ扱いを受けるでしょう’と言ったことがある。今の子供たちは祖父母の愛を知らない。攻撃的なゲームに夢中になり、老人が隣りで咳でもしようものなら嫌な顔をする。老人たちがどんなに高額の遺産を残す遺書を書いても、海外にいる子供たちは葬式に出席する暇さえ無い。この小説は現代インド社会の実情を語り、インドの生活が西洋化され大家族の文化が廃れていく様を綴る。今一番の問題は、インドの人びとの感情が乾き始めていること。私たちの生活は近代的になった。それは悪いことではない。しかし自分の文化や伝統を捨ててはいけない。それではすべての闘いが中途半端になってしまう。女性の同権のための闘いも中途半端になってしまう。」[インタビュー2011 年 12 月 29 日]

スワミ老人がジャスワントに語る虚構の話の中で、高齢の女性アニマとの恋が話題になる。ボンベイに住むアニマとスワミが知り合うきっかけは結婚広告だった。実際このような広告は英字日刊紙に見られ、少なくとも大都会では高齢の女性にこのような広告を出す自由がある。ボンベイなどでは家族の理解も得られるのだ。

３－２）『ビータル・カー・ワクタ』『チャーワニー・メン・ベーガル』（アルパナ・ミシュラ）

『ビータル・カー・ワクタ(内なる時間)』は、アルパナの初めての短編作品集。ウパスティティ(Upasthiti)(出席)、バエ(Bhay)(恐れ)、カター　ケ　ガイルザルーリー　プラデーシュ　メン(Kathā ke gairzarūrī pradesh men)(物語の要らない州)、アンデーリー　スラング　メン　テーレーメーレー　アクシャル (Andher surang men ṭeṛhe meṛhe akshar)(暗いトンネルにある歪んだ文字)、ベタラティブ(Betaratīb)(無秩序)、ビータル・カー・ワクタの６編が編纂されている。『ウパスティティ』には鬱病の主婦が抱える深刻な悩みが繊細に描写され、先進諸国の抱える現代病がインド社会にも広まりだしたことを伝える。主婦の毎日は平凡で同じことの繰り返し。毎朝子供と夫を送り出す日常の描写には、鬱をわずらう主婦の誰にも言えない

不満が溢れている。以前の作品には、従属したくない女性の叫びや、女性対男性もしくは家という構図があった。しかしアルパナの作品には、自分自身でいたいという女性の叫びと、自分の内面に向かう構図がある。インドの女性の環境が変化したことがうかがえる。『ウパスティティ』では結婚後に自分の名前が変わることへの不満がつづられる。インド都市部の現代女性は、先進国の女性同様に、自分らしい人生を探している。主人公は医者になりたかった。何かになりたかった。しかし主婦になってしまった。「‘主婦’になることは、‘何かになる’ことではない。」[Alpana Mishra 2006:21]と言う。不満を抱えて家事をこなすだけの人生の空しさが、鬱発症のひとつの原因だ。『カター　ケ　ガイルザルーリー　プラデーシュ　メン』には、夫に追従するだけの、しかもその夫には存在を完全に無視されているアルンダティの人生が描かれる。彼女自身も自分のちっぽけで無意味な人生に価値を見出せない。アルンダティが女性という人間で、感情があることを作者は強調する。「生きるために恋愛が必要なんてこれほど当たり前のことはない。それが女性にはないなんて！」[Alpana Mishra 2006:63]そしてアルンダティの自慰行為の描写から、人間としての欲求が女性にもあることを明確にする。アルパナは同作品の中で、男性の無理解、女性の感情を無視した行動などを様々な形で指摘している。夫ジャガトは、自分の都合でアルンダティを無視するが、性欲解消には彼女を利用する。性欲解消の道具にされる妻の例は多い。『ウパスティティ』では、無神経な夫との性交渉に苦しむ妻の姿が描かれている。『バエ』では何度も流産した登場人物が日記にこう記す。「望まないセックスに苦しむ女性はつわりが酷い。口から自分の子宮を吐き出そうとしているようだ。」[Alpana Mishra 2006:42]夫の無理解に対する妻の恨みは深い。『アンデーリー　スラングメン　テーレーメーレー　アクシャル』では、痴呆の妻ラジラニの、年老いた夫タークルへの復讐が描かれる。妻は長年自分のやりたいことを我慢し、家族に自分の人生を捧げてきた。しかし何も気づかず、まったく罪の意識もない夫。歳をとり痴呆になり、精神的な束縛から放たれ、やっと自分の本心を言えるようになった妻。ここでは一世代前の夫婦の形を示唆する。自然なことを不自然、不自然なことを自然と教えられ、自然な欲求が

押さえつけられると、不自然でゆがんだ欲求が生まれ、社会にひずみが生じる。自由な恋愛が確立してこそ、男女が互いの存在を尊重することができると作者は訴える。インドの日常生活では、女性は女性の近くにいるようになる。痴漢やセクハラから身を護るための当然の方法で、しつけられずとも、おのずと身に着く。この不自然な行動が、インド社会では当然の行動になってしまう。『ベタラティブ』では、主人公の母の苦しみが描かれる。一人の人間として数えてもらえない家に生きてきた母、まったく理解のない父に対する恨みは深い。妻、嫁という女性の中に、人間の心を認めない家と男性の責任を問う。なぜ女性は人間らしさよりも世間体を重んじるのか。もしくは、どうして社会は、女性に世間体をおしつけるのか。社会が女性を人間の頭数にいれていないことが原因のひとつだ。アルパナによれば、

「伝統的に女は財産とされてきた。昔の王は、負ければ、自分の娘を報酬として敵国に差し出した。女性をモノ扱いする伝統が長く続いた原因は、教育の欠如だ。インドで女性教育が始まった１９００年ごろ、女性の覚醒を目指して教育が始まった。女子教育の目的は家事や衛生の向上、つまり家庭環境の向上だった。しかし社会にとって予想外の展開が生じる。教育を受けた女性は覚醒し、様々なことを知り、様々な要求をし、様々な疑問を持つようになった。そして社会では様々な衝突が生じた。現代は男女ともに少しずつコンディショニングから解放されつつあり、両者に変化が現れている。良い方向に変りつつあるといえる。男女がお互いを尊重するようになり、平等が確立しつつある情況もわずかだが見られるようになってきた。このように、女性を人間として見る視点が大切なのだ。」[インタビュー2011 年 10 月７日]

もう一つの原因は、男女のコンディショニングだ。アルパナによれば

「男女ともにコンディショニングから解放される必要がある。固定観念とも言うべき、それぞれが社会の中でこうするべきと心にすり込まれたものを変えなければならない。女性の例を言えば、自分の決断がもたらす結果から逃げるために決断自体をためらったり、今までこ

うだったから、みんながこうだから同じ様にしなければならないと、なんの疑いもなく思うこと。それが女性のコンディショニングだ。知能があっても判断力がなければ知能の意味がない。判断力とは、正邪を見極める知能だ。男性のコンディショニングにも変革が必要だ。女性は女性らしく、妻らしく生きなければならない、女性だから台所仕事しなけれならない、子供の面倒を見なければならない、というのが男性のそれだ。男女双方が、誰かに言われたのでも、誰かに分担されたのでもなく、それぞれがそれぞれの思い込みで行動している。現代社会の女性にはサリーを着て祭事を行うなど、伝統的インド人女性としての理想の姿が求められる一方で、良い職につき高い地位も得るなどの現代性も求められる。つまり、外では現代的で、家庭に戻ったら伝統的な女性になることが求められる。職場では判断力が求められ、家では判断力を捨てるように求められる。一人の人間にそんなことができるはずもない。しかしそれが現実なのだ。男女同等であるべきなのに、女性には家の中で発言の自由も無い。インド社会の外見は非常に現代的になった。しかしその内面も同じように変ったとはとても言えない。それでも、変わる方向に進んでいることは確かだ。」[インタビュー2011 年 10 月 7 日]

短編作品集『チャーワニー・メン・ベーガル』の８作品にはさまざまな社会問題が取り上げられている。『ムクティプラサング（Mukti prasang）(自由のチャンス)』では、女性への性的抑圧の問題を取り上げ、公共の乗り物の中で起こる日常的なセクハラ被害を描く。大変な精神的疲労を伴なうが、経済的に公共機関で通勤せざるを得ない女性たちにはそれが日常であり、このような問題を毎日乗り越えていくしかない。女性に無意味な苦労を押し付けるこの歪んだ社会が普通の社会なのだ。このため女性は一人で外出することをためらいがちになる。そして、いつも男性と一緒に護られる形で移動するようになる。恐怖とストレスを乗り越え、女性が自立する瞬間が次のように描かれる。「初出勤のその日、夫なしで一人ででかけた。夫はなかなか出発しないバスを待ちきれず、仕事に遅れると、私をバス停に置き去りにした。車掌や運転手に私のことを頼みもしないで。夫にとって家

族や親戚や人や社会よりも仕事が大切なものなら、私にとっても同じくらい仕事は大切なものでなければならない。バス停にひとりで立ち尽くしながら、突然自分の人生を分析し、そして一大決意をした。」[Alpana Mishra 2008:11]　主人公は外だけではなく、家の中でも性的ストレスにさらされている。異常な性的行為を受け入れられない主人公は、妻もしくは女性の義務を果たせない罪悪感に苛まれてしまう。夫の権利の絶対性はこれだけではない。インドでは一般的に男性が家計を管理していて、働く女性でも自分の給料を全額夫に渡すのが一般的だ。不満と疑問を持ちながら「金ならくれてやる、家が平和なほうがいい」[Alpana Mishra 2008:17]と思う。働く女性でも経済的な自立を感じることができない。専業主婦でも働く女性でも家庭内での夫の支配は続く。

『ミッドデーミール(給食)』は現代インドの学校の問題を取り上げた作品。政府は子供たちの就学率と健康の向上を目的に給食制度を始めたが、質の悪さが問題になっており、食中毒も多発している。同作品は、地方の公立学校の劣悪な教育環境、政府のずさんな対応、汚職などを告発し、政府が奨励する給食制度の建前と食中毒の実情を描く。何故給食の質が落ちてしまうのか。その原因は政府のずさんな対応と汚職だ。子供や弱者を守るため、児童労働を禁止する法律や、初等教育の義務化の法律ができても現実社会では機能していないと作者は訴える。工場の劣悪な労働環境も描かれる。そこでも労働法は守られていない。工場で働くラニは、貧しいが非常に聡明で自立した女性。夫よりも安定した工場労働の職につき、実質上家計を支えている。夫も素直に妻の素晴らしさを認め愛している。作品集の中、唯一自立した女性として登場するラニについて作者は語る。

> 「女性にとって大切なのは、いつまでも誰かに手を引いてもらうのではなく、自分で自分の居場所を作ること。つまり自立することだ。労働者階級のラニは自分で自分の居場所を作った女性であり、自分で決断を下せる女性。この女性を通して私は、女性が本来どれほどの力を持つのかを描いた。知力と判断力のある女性がどれほどのことができるのか。彼女の判断の正当性は夫を従えるほどだ。」[インタビュー 2011 年 10 月 7 日]

『タマーシャー（Tamāshā）(お芝居)』は、女性の自立の難しさと働く女性の苦しみがテーマ。女性面接館は大学の面接試験当日、家の事情で順番を早めてほしいという女子学生を批判する。このような女性の行動はインドで日常的にみられ、社会で一定の理解を得る弁明として受け入れられている。作者は女性の公私混同した行動をどう捉えているのか。

「女性が社会進出する難しさをこの作品では描いている。公私混同しているように見える女性たちの行動を否定的に描いているわけではない。女性の働く環境が社会に全く整っていないから、女性をこのような行動に走らせるのだ。社会も、家庭も、職場も、大学も、どこも全く環境が整っていない。女性の社会進出に必要な特別な待遇が全く考慮されていない。作品にもあるように、インド社会では面接など公的な場でも規則通りに物事が進行せず、何事も権力者の気分次第という場合がある。そんな現状を悪用して面接官に取り入る女性もいる。このような女性がひとりいるおかげで、多くの女性が迷惑をこうむる。このような女性の行動が、他の女性の深刻な問題を‘女はいつもこうだ’というものにすりかえてしまう。」[インタビュー2011 年 10 月 7 日]

男性にとっては取るに足らないことが、女性にとっては面接時間の変更を申し込むほどの一大事になるのはなぜか。女性だけに家庭と家事の全責任が押し付けられているからだ。働く女性は家庭の問題で仕事がおろそかになると批判される。しかし仕事が忙しく家庭の問題を顧みない男性が批判されることは少ない。女性にとって家庭と仕事の両立は非常に困難で、託児所などの環境が整っていないインドではなおさらだ。作品中の女性面接官もワーキングマザーで、幼い子供を家に置いてきている。仕事と子供の間でいつもぎりぎりの選択をしている。インドの中流階級の共働きの女性とその子供の現実が描かれる。女性が家庭と職場の責任を同等に果たそうとすると、ひずみは子供にでる。危険にさらされることもある。『ベーダカル(Bedakhal)(立ち退き)』で作者は、上層、中流、下層階級どこにいても女性の地位は低いと指摘する。女性を社会的弱者にしてしまうインドの複雑社会構造を描き、女性の地位の低さは女性自身の意識にすりこまれてい

るという。『リストセガーヤブ(List se gāyab) (リストに無い)』で専業主婦の主人公は夫の浮気現場を目撃するが、今の生活を維持することも子供を幸せにすることもできないと離婚を我慢する。家庭の全責任が女性だけに課せられていることが様々な問題の原因であることは前述した。ここでは女性が家事や育児を受け持つことが、夫に寄生するという解釈になっている。誰かが家庭の仕事を担当しなければ、人間生活は成り立たないというのに。主人公の人生は子供ためだけにある。結婚は自分以外のためもので、夫や子供や家のためのものだ。しかし主人公は自分の人生を諦めない。何年もかけて夫を説得し、やっと仕事の面接を受ける。面接官は、あなたは仕事をしなくても食べていけるが、外には貧乏な人が面接に並んでいると言う。何のために働くのか。生きるため、夢のため、自立のため。ただ生きるために働く人を前に、彼女の夢は価値を失う。貧しい人々を前に、自分の尊厳を護るために自立したい彼女の願いが叶うことはない。生きているだけで十分と、過酷な人生を受け入れなければならないのか。インドの複雑な社会構造にがんじがらめになる女性が描かれている。アルパナは作品の多くで既婚女性の問題を取り上げる。作者の結婚に対する見解はこうだ。

「女性にとって結婚というものが良いか悪いかというよりも、結婚後にサポートを得られるか否かによって、その良し悪しは決まる。しかし現実問題として、多くの場合、女性は家事や子育てのサポートを得られない。だから結婚自体が悪いものとなってしまう。私は「結婚」とは、父権社会の最も小さい組織と考えている。家族は父権主義の中心であり、自由、平等、表現の自由、公平をインドの社会構造に確立するには、まず家族にそれを確立しなければならない。今の若い世代の女性は、結婚というものをほとんど信用していない。結婚と同時に多くの妥協を求められるのだから束縛以外のなにものでもない。だから結婚などせず、自分で働き、自由にお金を使う生活を選択する女性が増えているのも事実だ。私が思うに、結婚というのは非常に強固なシステムだ。結婚すれば、双方が何かしらを犠牲にしなければならない。しかしこの社会では、一方には全てがあり、一方には何も無い。いつも犠牲を強いられるのは女性だ」[インタビュー2011 年 10 月 7

日]

『イス　ジャハン　メン　ハム(Is jahān men ham) (ここにいる私)』は働く女性の問題を取り上げる。仕事と育児の両立に苦労し、職場では女性というだけで邪魔者扱いされ、セクハラもされる。稼いでいても、家計は夫に握られている。自分で携帯すら買うこともできない。その事情を知ってか知らずか、嫌味をいう同僚男性。家庭では夫の束縛に悩まされる。夫に意見しようとするが、思い直す。「夫は変化についていけないんだ。でも変っていくものだから仕方ない。私はそう思って夫をかまうのをやめた」[Alpana Mishra 2008:111]と。男性の順応性の無さと無意味で幼稚な束縛が描かれている。『チャーワニー・メン・ベーガル（兵営地区の宿無し）』のテーマは、カルギル戦争当時の軍人とその家族の生活。一般市民の平和な生活の陰には、戦争と死が日常の軍人とその家族の生活がある。平和に見える社会にも、戦地で苦しみ死んでいく軍人とその家族がいる。表立って扱われない軍人社会に光をあて、読者に日常に潜む見えない戦争を示唆し、殉死に対する政府のずさんで不当な対応を批判する。

このようにアルパナの作品には、現代社会の女性が直面している問題の現状、原因、解決策を示唆するものが多くみられる。

４．終わりに

チットラー・ムドゥガルは社会活動と執筆活動を両立する数少ない作家。彼女いわく、インド社会における最大の女性問題は自分の意見を言う自由が無いこと。自分は男性に比べて無能だというコンディショニングからの解放が必要だ。言葉と頭脳を取り戻す闘いが必要で、女性の性の解放は意味が無い。社会活動の経験に基づく彼女の言葉は重く、性的虐待の被害者の女性が沈黙を強いられる社会を批判する。チットラーは女性の幸福は子宮にあると言う。子宮は新しい社会を創造する。『アーワーン』では社会改革のキーを握るのは女性だとし、女性が覚醒すれば家庭は変わり、社会は変わると訴える。世界的な広い視野をもち身近な活動を展開できる覚醒した女性が小説に登場する。主人公のナミターはモデルとして成功している時とジュエリーデザイナーとして有望視されている時に幸せを感じている。

社会で能力を認められ、女性の頭脳を取り戻す闘いの中に幸福を感じている。西洋文化ではなく、インド自国の文化を大切にすべきとチットラーは語る。大家族はインドの大切な文化で、核家族の増加による消滅を危惧している。『ギリガドゥ』では高齢者問題をとりあげ、人間関係が希薄になり人間の感情が乾いていく現代社会に警告を発している。

１９６９年生まれのアルパナ・ミシュラは、他の女性作家たちとは世代が違う。彼女の作品も女性の問題が中心だが、異なる特徴と新しい感性が見られる。男対女ではなく、女性自身を中心にその内面の葛藤やアイデンティティを描く。登場人物は外に向かって闘うことはもちろん、内に向っても闘っている。アルパナによれば、インド社会で最も深刻な女性問題は、不公平と平等の権利が無いこと。家という封建的な場所から抜け出し、働く女性が行き着く先は、また職場という封建社会で、そこには女性の社会進出に必要な環境が全く整っていない。社会構造自体の変革が必要だ。男女ともにコンディショニングから解放されなければならない。クリシュナー、マンヌー、マイトレーイーと同じくアルパナも、男性が女性の変化に対応できないことを指摘する。女性の幸福についてアルパナは、家庭と子供を自分の幸せの中心にするようにインドの女性の考え方や環境は作り上げられていると警告を発する。しかし今、女性は個人的に獲得したもの、願望、夢の実現に幸福の喜びを感じるようになってきたという。マンヌーの言ように、以前の女性には名前が無かった。現代女性は自分の名前を手に入れたが、結婚と同時に名前を変えられてしまう場合もある。アルパナは結婚とともに名前が変わることに対する現代女性の違和感と悲しみを描く。いまだに女性は家では決断力を捨てるよう、外では決断力を持つよう求められる。外見は現代的になったインドだが、家には不平等が蔓延しているという。

古い作品に登場する女性ほど、社会や男性など外に向かって闘う傾向が強い。時代が進むにつれ、女性は自分自身という内面と外、両方に向かって闘わなければならないようになる。この特徴は一番若手のアルパナ・ミシュラの作品に顕著だ。７人の女性作家全員の作品が示唆することは、女性は感じる必要のない罪悪感に苛まれていて、それは女性の自立と自由の

大きな障害だということだ。社会から植えつけられた罪悪感を乗り越え、自分の要求の正当性に目をむけようと示唆する。以前の女性は他人の要求を満たす役割だけを担っていた。しかし疑問が芽生え、葛藤がおこり、周囲との衝突が生じるようになった。現代女性は自分自身と他人、両方の要求を満たす役割を背負って生きている。女性作家の描く同時代ヒンディー文学には、社会と自分自身という二重の障害と格闘しながら自立に向かう現代女性が映し出されている。

最後にインド女性の幸福について作家と作品に基づいてまとめる。クリシュナーは、女性の幸福は選択する感覚、決断、自分自身のために生きることにあるという。それは『ミットロー・マルジャーニー』のミットローの行動に強調されている。家族や子供から離れた個人の幸福という時代を先取りした女性の幸福を描いたのは、クリシュナーが『サマエ・サルガム』のアーランニャーのように１９６０年代には稀にみる自由な女性だったからだ。マンヌーは、女性の幸福は家族と子供にあると断言する。『アープカバンティ』のシャクンはジョシに出会い、孤独な人生から開放され幸せを感じる。その先にあるはずの幸福な家庭を夢見ての感情だ。ムリドゥラは、女性の幸福は、母性の幸福、無償の愛を与える母になる幸福だという。女性の性を謳歌する作家ムリドゥラは、恋愛も女性の幸福で、男女の恋愛感情には性欲が伴なうとし、愛を伴なうセックスの喜びは男女両方にとって最大もので性的快楽を求める権利は女性にもあると強調する。他の女性作家の小説でも、一時的であっても恋愛は女性の幸せな感情として描かれる。マイトレイもクリシュナーのように、女性の幸福は自分の思い通りに決断を下せるところにあるという。また人間として、自分の五感を自分の思い通りに使えるところに幸せがあるという。彼女の小説の女性たちは自由を楽しんでいる。チャークではお祭りで歌や踊りを楽しみ、ジューラーナトでは物欲が満たされ幸せを感じる。一方、男性の犠牲になることや男性の性欲を満たすことに幸せを感じる女性も描かれる。チットラーは現代女性の最大の幸せは自分の子宮から新しい社会を作れることという。自分が欲するように子供を教育し、男性と平等の社会を作ることが恒久の幸福だという。アーワーンでも妊娠や子供が重要なテーマになっている。アルパナ

は、家庭と子供を自分の幸せの中心にするように、インドの女性の考え方や環境が作り上げられていて、それはコンディショニングだと警告する。最近は女性が個人的に獲得したものも彼女の幸福とされるようになったとし、個人的な願望や夢の実現に、女性は幸福や喜びを感じると語る。一番古い世代のクリシュナーの視点と類似している。

文献リスト

1999 *Aawaan* 2007 Samayik prakashan

Mudgal, Chitra

2002 *Gilligaddu* 2010 Samayik prakashan

Mudgal, Chitra

2006 *Bhitar ka vakt* 2006 Bhartiya jnanpith

Mishra, Alpana

2008 *Chhavani men beghar* 2009 Bhartiya jnanpith

Mishra, Alpana

Samkalin Sahitya Samachar 2010 October

オンライン文献

[Chitra Mudgal online 1]

Chitra Mudgal

(2014 年 1 月 20 日)　　＜2014 年 1 月 21 日＞